

日本貝類学の先駆者

いわかわともたろう
岩川友太郎

ペリーが率いる、アメリカ艦隊が日本にやって来たのは、一八五三年（嘉永六）のことである。

「やあつ。」

「恐ろしい船（軍艦）が来たぞつ。」

「黒い煙をはいて…でっかい鋼鉄の船だぞつ。」

浦賀沖に姿をあらわした黒船を見て、人々は不安と恐怖におののいた。その一方では「黒船は追いかえせつ。」という攘夷論者と、「この機会に外国と交流をはかるべきだ。」という開国論者がはげしく対立した。

非常の事態に立たされた幕府は、ついにアメリカと通商条約をむすび、貿易をすることに決めた。（その後アメリカにつづいてフランス、イギリス、ロシアなどとも通商条約をむすぶ）長いあいだ国をとざして来た日本にとって、開国はまさに画期的な大改革だった。

ちやうどこの動乱のさなか、弘前に生まれてのちに軟体動物——とくに貝類学の先駆者として、世界的にも不滅の業績をのこした学者がいる。岩川友太郎である。

友太郎は一八五四年（安政元）、弘前の本町で生まれた。生まれつき体が弱く腺病質で、七、八歳の頃までは、文字通り骨と皮ばかりのやせっぽちだった。

父は貧しい経師屋（表具師）だったが、祖父は津軽藩校（学問所）につとめる、温厚で人望の高い国文学者だった。とくに詩文にすぐれ、藩中でも知らないものはなかった。父には祖父が自慢だった。

「友太郎。じいは藩中でも、有名な学者だったんだぞ。お前も将来は、学問で身を立てるようにせい。」それが父の口ぐせだった。

父は夕食のあとで、よく友太郎に百人一首を教えた。が、遊びにつかれた友太郎は、勉強どころではなく、すぐ睡りかけた。それを見て父は、顔を真っ赤にしてどなりつけた。

「勉強のときに居睡りするとは、なにごとだっ。」父はそばにある火箸を手にとって、息子の頭をなぐりつけた。だから友太郎の頭には、生傷がたえなかった。

友太郎は長男だが、生活が苦しかったので、口べらし（食糧を節約すること）のため寺へ小僧に出した。

猿賀（いまの南部尾上町）の神宮寺で友太郎が九歳のときだった。

猿賀は友太郎の母が出た村であり、父は寺の住職と面識があったからである。

住職は人徳の高い人で、昇格して神宮寺から弘前の薬王院へ、さらに藩主の菩提寺である報恩寺の住職へとかわり、友太郎も住職について寺を転々とした。

このとき友太郎少年は、自分の将来を真剣に考えた。

「いつまでも寺にいては、うだつが上がらない。」と、思つて寺をとび出したのである。

寺を出た友太郎がまっすぐに尋ねたのは、伯父の岩川藤兵衛だった。

当時伯父は、藩の馬廻り役だった。友太郎は伯父のもとで槍や剣、鉄砲などの武術を身につけようと思つたからである。

が、あわただしく変貌する時代だった。時代に対応するには、武術だけではいけないと友太郎は感じた。

そのころ藩では、軍艦操縦のための海軍局（海軍の学校）を設けていたが、友太郎はさっそく海軍局に入つて機関学を学んだ。一八六八年

（慶応四）、十五歳のときである。

友太郎が海軍局で学んだのは二年間。こんどは英学寮で英語を学んだ。

津軽藩十二代藩主承昭のころである。

承昭は学問を奨励し、学業のすぐれた青年には、公費を支給して先進地に派遣し勉学をさせた（いまの内地留学にあたる）人であり、英学

寮も将来、有望な若者に勉学をすすめるために建てたものだった。

場所は弘前城東門前堀端の近くだった。

「外国を知るには海軍局で学ぶより、英語を身につけねばいけない。」友太郎が英学寮に入ったのは、こうした理由からだ。一八七〇年（明治三）のことである。

しかし英学寮はまもなく閉鎖になり、青森に移った。

が、青森でも長つづきはせず閉鎖になったからである。英学寮がなくなって友太郎は、がっかりして弘前にもどって来た。

やがて藩校（稽古館）のあと地（下白銀町）に、東奥義塾が建てられ一八七三年（明治六）に開校した。

開校と同時に友太郎は、東奥義塾に英語の教師として迎えられた。彼の英語の学力が高く評価されたからだ。

英学部二等教授という職名だった。友太郎は、まだ二十歳の若さだった。

このときの東奥義塾の頭取教授（塾長にあたる）は、教育者として有名な兼松成言（石居）である。のちに外交官として活躍をした、珍田

捨巳も教師をしていた。

友太郎がつとめてまもなく、東奥義塾にアメリカから英語の教師、ウォルフが着任した。

「先生。私に英語を教えてください。」

自分でも英語の教師である友太郎が、さっそくウォルフに指導をお願いしたのである。

向学心にもえる友太郎は、直接外人から英語を学びたかったからだ。

「おうー・よ・ろ・し・い・と・も…。」

ウォルフは両手を広げ、たどたどしい日本語で、友太郎の願いをよろこんで引きうけてくれた。

さて、実際に手ほどきを見て、ウォルフは友太郎の語学力のすばらしさに感嘆した。

「おつ。ワンダフル、ワンダフル。」

ウォルフは手ばなしでほめながら、友太郎の学問に打ちこむ真剣さに心を打たれた。

が、ウォルフは一年つとめたただけで、東奥義塾を去って上京することになった。宣教師のしごとに従事するためだった。このとき友太郎は通訳として同行した。

東京に着いてから、ウォルフは改まったように友太郎に顔をむけた。

「外国語学校に入って、みっちり勉強を下さい。あなたの、すばらしい語学の力を、さらにのばすためにも。」とすすめた。

「先生、ありがとうございます。僕も精いっぱいやってみます。」

感激しながら友太郎は、すすめられるまま東京外国語学校で学んだのである。ここは官費（国の費用でまかなう）で、学費がかからないのが、貧しい友太郎には魅力だった。

それがあと一年で卒業というときに、学校は東京英語学校とかわり、同時に官費の制度は廃止になった。

これが友太郎には打撃だった。東京では金の捻出が^{ねんしゅつ}できず、わざわざ弘前まで帰って学費を^{くめん}工面し、ようやく東京英語学校を卒業したのである。一八七五年（明治八）である。

英語学校を卒業した年、友太郎は東京開成学校に受験して合格をした。開成学校は、のちの東京大学である。

このときの開成学校の教師は、ほとんど外人だった。だからどの教科も、英語を中心とした語学教授だったのである。

開成学校から東京大学となったのは、一八七七年（明治十）——このとき友太郎と同じ学年に、のちに内閣総理大臣となった加藤高明が法学部に、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎が文学部にいた。友太郎は理学部だった。

前の外国語学校と同じように、開成学校の時も官費で授業料はなく、しかも学生たちに、毎月八円（いまの金で、約二十万円ほどに当ると思われる）ずつ支給になった。

学生たちは、八円の中から宿舍費や食費など六円を支払い、のこりの二円は小遣いこづかだった。友太郎のように家の貧しい者には、どれほど助かったかしない。

だが、東京大学になってから、官費給与制が廃止になり、友太郎は学費の不足を旧津輕藩主から援助されたのである。

友太郎は子供のころから、昆虫やエビ・カニなどに興味はあったが、のちに貝類学者として一生を決めたのは、東京大学で教えをうけた、モース先生との出会いがあったからである。

モースは東京大学の、初代動物学教授であり、大森貝塚の発見者としても有名である。

（註） 大森貝塚は縄文時代のもので、おびただしい量の貝殻のほかに、土器や石器、骨器などが出土した。場所はいまの東京都大田区山王一丁目で、ここにモースが調査したのを記念して石碑が建っている。

アメリカからモースが来たのは、一八七七年（明治十）——目的は腕足類の調査研究のためだった。が、すぐれた学識をかわれて、東京大

学に迎えられるのである。

(註) 腕足類は、斧足類のように二枚の貝がらを持っているが、カキやハマグリ、アサリなどとは体の構造が異なる。腕足類に入るものとして、シャミセン貝やホオズキ貝などがある。

わが国の現代生物学は、モースによって開かれたが、彼が東京大学で教鞭きょうべんをとったのは四十歳のときだった。

それまでの日本において、生物学はまったく新しい学問だった。だから志望するものも少なく、東京大学で動物学を専攻したのは、岩川友太郎など、わずか四人にすぎなかった。

それだけに友太郎は、モースの影響を強く受けたのである。

モースは学識が高いだけでなく、能弁で講義がうまかった。講義のときは右手で文字を書きながら、左手で上手に絵をかいて説明するという器用さをもっていた。

明るく朗らかで、学識を鼻にかけるなど微塵みじんもなく、だれにでも懇切こんせつていねいな人柄だった。

何よりも友太郎たち学生が、耳をそばだてたのは、進化論をとり入れたモースの講義だった。

「諸君。人間の祖先は猿からわかれたんだよ。」

「猿からわかれた？」

「そうさ。この地球上には数多くの生物がいるが、体のかんたんなものから生まれて、長いあいだに進化したものが多んだよ。」

ダーウインの進化論——「種の起源」が世に出たのは一八五九年（安政六）だが、それから約二十年後にモースによって、わが国に紹介されたのであり、それをはじめて聞いたのが友太郎たちだった。モースの講義に大きな感銘を受けた。

友太郎が貝類学の研究に取り組むようになったのは、モースとの出会いによるのは先にも述べたが、その直接のきっかけをなしたのは、大森貝塚の発掘にモースに同行して調査にたずさわったのが影響している。

東京大学で友太郎が、モースの講義を受けたのは二年間だった。（モースは教授をやめて、アメリカに帰ったからである。）

モースの後任は、海産動物学が専門のホイットマン教授だった。

わが国の近代動物学に、はじめてレールを敷いたのをモースだとすれば、ホイットマンは、レールの上に汽車を走らせた人といっている。

モースが貝類学を理論的に教えたのに対して、ホイットマンは講義に顕微鏡など、教具を用いた新しい実験生物学をおこなったのが特色だった。

友太郎が東京大学を卒業したのは一八八一年（明治十四）、二十八歳のときだった。

卒業の年に友太郎は、東京師範学校の教諭となり理科を担当した。

友太郎は授業のかたわら、これまでの調査研究を二冊の本にまとめた。すなわち生物学専門のことば（学術語）を、わかりやすい日本語に
なおした「生物学語彙」と「動植物採集標本製作法」だった。

やがて友太郎は結婚をし、一八九〇年（明治二十三）に東京高等師範学校（高師）、兼女子高等師範学校（女高師）の教授に任ぜられた。

この一年まえ——一八八九年（明治二十二）に友太郎は、帝室博物館の水産部調査員を嘱託された。のちに嘱託から正式に学芸委員に任命
され、一九二五年（大正十四）まで三十六年間にわたって、博物標本の収集と整理にあたった。

友太郎は高師と女高師につとめながら、帝室博物館のしごとをする多忙な中で、貝類の採集研究も精力的につづけた。

貝類の採集研究は実に二十年間にわたり、その範囲は北海道・青森・宮城・埼玉・群馬・福島・大阪・兵庫・香川・島根・石川・福井・福
岡・佐賀など日本各地に及んでいる。

教職にあった友太郎は、夏休み冬休みのすべてを、この貝類の採集調査にあてていたのである。

友太郎にとっての大事業は、「日本産貝類標本目録」の編さんだった。

これは一九〇〇年（明治三十三年）と一九〇五年（明治三十八年）にわたって、帝室博物館所蔵の貝類標本目録に頭足類・腹足類・斧足類など五項目にわたって六四九種を収めたが、さらに海産腹足類なども追加し学名を正しいものにした。

友太郎はその後も標本目録編さんのしごとをつづけながら、系統的に分類・整理し頭足類三種、腹足類九六八種、斧足類三五九種など合せて一七七〇種、その他の変種を一六〇種収録した。

いうまでもなく、これは日本人の生物学者によって、初めてなされた偉大な業績だった。

友太郎は、一九二五年（大正十四年）長年つとめた東京高師と女高師の教職を退き、帝室博物館の学芸委員も辞任した。七十二歳のときだった。

輝かしい友太郎の業績に対して政府は、従三位勲二等に叙した。

友太郎の生涯で、二つの悲しい出来ごとがあった。一つは一九二三年（大正十二年）の関東大震災で、長年調査・研究した資料（貝類）のすべてを焼失したことであり、もうひとつは友太郎の師、モースの訃報ふほうに接したことである。

モースが亡くなったのは一九二五年（大正十四年）、八十八歳だった。

「私を育ててくれた先生が亡くなられた。」

訃報を聞いたとき友太郎は、悲歎にくれながら奥座敷にすわって、東に向きながら二日の間、じつと祈りをこめていたという。

東の方にモースの家（アメリカ、マサチューセッツ州セーラムの町に）があったからである。

関東大震災で、貴重な資料を焼失した友太郎について、当時の東宮侍従は次のようにのべている。

「先生の過去何十年にわたる研究手記や書籍・標本などを焼失して寄る年なみの先生は、落胆のあまり立ちあがることも出来ませんでした。

が、やがて気持を取りなおされました。そして記憶をたどりながら、或いは手記原稿の残りをもとに、生きていく限りまたしごと（復元）

をつづける、とおっしゃいました。」

侍従のことばの通り友太郎は、老後もずっと貝類のしごとを続けた。

友太郎が東京女高師の動物教室にいたころ、助手をつとめたのは弘前出身の町田きえだった。きえは、そのころの友太郎を次のように話している。

「私が弘前高女（いまの弘前中央高校）を出て、岩川先生の助手になったのは一九二二年（大正十一）のことです。先生はきれい好きで、い

つも机の上をきちんと整理されていました。教官室の入口のそばに、小さな流しがありましたが、蛇口がゆるんでぼたり、ぼたりと水の落ちる音がします。さっそく先生は、蛇口にほうたいを巻いて、音がしないようにされました。」

「先生の貝類の標本は見ごとなもので、机の引き出しには黒塗の小箱がたくさんならび、それに分類された各種の貝が、きちんと収められていました。うすくてこわれやすいものは、箱の底に綿を敷いて、ひとつひとつ、ていねいに並べられました。そして毎朝、そつと引き出しをあけて、貝の状態がどうなっているか、確かめられるのが決まりでした。」

とのべている。

友太郎の神経質なほどの、几帳面さをうかがわせる。

年をとってからの友太郎は、暇があるとよく寄席に行つて落語を聞いたり、読書をしたりした。

読書——それもむずかしい生物学の専門書ではなく、中里介山の「大菩薩峠」や大仏次郎の「鞍馬天狗」、子母沢寛の「新撰組始末記」などだった。

世界的な貝類学者と落語や、歴史物の小説との組み合わせは、考えただけでもほほえましくなる。

友太郎も恩師のモースや、ホイットマンのように心のやさしい親切な人で、みんなにしたしまれたが、一九三三年（昭和八）病気で亡くな

った。八十歳だった。

参考文献

尾崎竹四郎編「青森県人名大事典」一九六九年（昭和四十四）東奥日報社
船水 清「岩川友太郎伝」一九八三年（昭和五十八）岩川友太郎伝刊行会

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、八三、九四頁